

一通の手紙

《高校生・一般の部 金賞》

広島皆実高等学校一年 伊藤 そら

今、友だちに伝えたいこと、それは私を支えてくれてありがとうという感謝の気持ちです。

皆実高校衛生看護科への道を決めてから生徒会活動に力を入れ、様々な力を養うと共に、毎日、面接練習、小論文対策を行いました。それでも塾の先生方には「選抜一では受からないだろう」と言われ続けていました。さらに選抜一の三・五倍という倍率に打ちのめされてしまい、自分の中で「合格」という希望はかすかなものになりました。そのような時に、手紙をくれたのが幼なじみの女の子でした。そこに書かれていた言葉を、今でもはつきりと覚えています。

「合格は狭き門かもしれない。けれど私は、貴方が誰も見ていないところで努力していることを知っています。貴方なら絶対大丈夫。自分を信じて。」

今、皆実高校の衛生看護科に居られるのは、親の支えとその子の一通の手紙のおかげです。自分の事のように合格を喜んでくれた貴方へ、本当にありがとう。次は私が支える番です。

大切な存在

《高校生・一般の部 銀賞》

可部高等学校三年 藤川 夏未

私は2年生の頃に一緒にいた友達から悪口を言われたり、無視をされたりしていました。そんな時、相談に乗ってくれたり、なぐさめてくれたりする友達がいました。その人がいつも言ってくれていた言葉がどんな事があったてもいつも味方になるから今は自分がどんな気持ちでどんな事が不安なのか言ってみてと言ってくれました。その言葉に今まで思っていたにも相談できなかった事を話すことができて、心にあった暗い気持ちも全部吹き飛んでいきました。今思うと、その友達の言葉がなかったら今も人の目を気にして何もしたくないなどどんな事に対しても意欲がわいていなかったと思います。そんな友達に今私がいい事は「ありがとう」という言葉と「これから私が味方になるから何かつらい事があった時や相談したい事がある時はいつでも聞くね」と言いたいと思います。何よりも大切なものは何でも言える友達や家族の存在だなと思いました。

ありがとう以上の：

《高校生・一般の部 銅賞》

基町高等学校一年 上田 結生

私には親友がいる。同じマンションに住んでいて、小学一年生から中学三年生までの九年間は必ず一緒に登下校していた。私と彼女は何でも言い合える仲だ。登下校中は悩みや不満、将来に対する不安などを言い合った。ただ言い合うだけで問題が解決する訳ではなかったが、何だか気持ちすがすつきりし、頑張ろうと思えてくるのだ。高校受験もそうやって二人で乗り越えてきた。

しかし、いつも一緒だった私達にも変化が訪れた。別々の高校に進学したのだ。私は入学してからの二週間で、彼女の存在の大きさを知った。私のわがままな所など、ありのままを受け入れてくれる彼女のような存在は当たり前ではないということに気づかされた。それに加え、新型コロナウイルスの影響で、私達はまったく会わなかった。私と彼女は不器用で、今まで感謝の気持ちをお互いに言ったことはない。でも私はこの状況だからこそ初めて彼女に伝えたい。

「ありがとう。いつも一緒に居てくれてありがとう。ありがとう以上のありがとう。」

ありがとう

《高校生・一般の部 銅賞》

A I C J 高等学校一年 上落 智遙

「おはよう」「またね」が両手で数える程でまた、会えなくなった。

「高校生になったら」という中学からの友達との約束も果たされていない。今ではメッセーシアプリが普及しているが直接言葉を交わす訳ではないから、どこか物足りない。そんな時、私の誕生日がきた。毎年、おめでとうメールにプレゼントに誕生日会とにぎやかなのに。眠ってから数分後に通知音で起こされた。見るとたくさんの友達から、多くのメッセーシがきていた。「覚えてくれてたんだ」ととても心が温かくなった。当たり前だと思っていた日常は、多くの人によって造り出されて存在していることを痛感した。

未知のウイルスに、私達の生活は奪われたが、自身を見直す機会を与えられた。「人」という字の如く、友達がいるから当たり前が存在している。今、必要な言葉は、ウイルスに対する恨み言でも、悪口でもない。「ありがとう」だと、私は思う。だからこれからは感謝の心を忘れず、友達との「当たり前日常」を私が造れる人になりたい。

青春とは

《高校生・一般の部 入選》

A I C J 高等学校一年 守山 まりあ

花の咲く頃……ではなく、木々がすっかり緑に覆われた頃、私の学校生活という歯車はようやく回り始めた。中学校三年生のときは、華華しい青春時代がもうすぐ幕を開けるのだと期待していたが、それは夢の中のお話に過ぎなかったのである。新型コロナウイルスの影響で学校は臨時休校となった上、宿題はたくさん出されていた。ウイルス感染防止のため、息抜きに出かけることさえできない。

その間、私の心の支えとなったのは、友達だった。直接会うことはできなかったが、連絡をとり合うだけでも、私はなぜかほっとした。「宿題いっぱい出たね。」「学校いつ始まるのかな。」などとたわいのない話をすることは、私の楽しみであった。そして、同じような日々を過ごしていくうち、私は思った、みんな私と同じ気持ちなのだ。親友も、幼稚園の友達も。そう考えると私は少し気が楽になり、これも青春かもしれないと感じた。だから、私は友達に伝えたい。みんな一緒に頑張ろう。

いつも、ありがとう

《高校生・一般の部 入選》

広島皆実高等学校一年 芦田 好葉

私は今、五年一貫で看護について学びを深めることのできる看護科のある学校に通っている。その五年間を共に過ごす仲間、この春出会、また過ごした期間はほんのわずかだけれど、素を出すことのできる友人ができた。

その友人とは通っていた中学校も違えば、住んでいる場所も遠く離れていて、教室内の席も見事に対角の端に置かれている。だけど、一緒に居ると家族と居る時の様に落ち着くことができ、本当に初めましての関係なのかと疑うこともある。そして私達は、性格が似ている部分が多いためか言動もよくそろう。生き別れの双子かと大爆笑することもしばしば。私が今こんなにも充実した日々を過ごせるのはきつとその友人の存在があるからだろう。

これから先共に過ごす五年間は、楽しさばかりではなく大変なことも多くあるだろう。時には逃げ出したくなる時もあるかもしれない。そんな時はその友人や仲間と、励まし合い高め合い、一つ一つ乗り越えようと思う。

今私が友人に伝えたいことは、「いつもありがとう。」「この言葉に尽きるだろう。」

「特別」

《高校生・一般の部 入選》

広島皆実高等学校二年 新地 夢羽

私にはなくてはならない存在がいる。それは女子バレー部の皆だ。私達は一年間休日も放課後も、長期休暇もずっと一緒にいて家族みたいな仲だと思う。バレー部の同級生は私含めて十三人いるが大人数でも仲が良いのが私達バレー部の良いところだ。それに私達十三人は一人一人とても個性が強く性格が皆バラバラだと思うがしかし全員がお互いを思いやり尊重し合えることができるステキな人達だ。私は一人だけ皆とは違う課のクラスで勉強の内容も全然違うのに輪から浮いていると思ったことはない。それはきっと皆が私のことを尊重してくれているからだと思う。私はつくづくこんなステキな人達に出会えて良かったと思う。クラスの事で疲れた時、まっさきにバレー部の皆に会いたいと思うし皆の顔が見ただけで心が軽くなる。私は皆にいつも助けてもらっているし、皆から笑顔をたくさんもらっているけどこのことが特別だとは思っていないかった。しかし皆と会えなくなつてやつと気づいた。皆の笑顔、皆の存在は私にとって「特別」だ。

言葉の大切さ

《高校生・一般の部 入選》

可部高等学校三年 小島 悠希

今年は新型コロナウイルスの影響で、学校に行けなくなったり、いつも当たり前にかえていた友達と会えなくなり、当たり前前に出来ていたことが今では当たり前前になくなってしまいました。

そこで自分が思ったことは、直接会って、話をして、あいさつができる喜びです。会って話をする事で、自然とうれしい気分になったり、楽しい気分になることができます。例えば、SNSだとしようもないことでも、会って話していると自然と笑顔がでてきます。それは文字だと雰囲気上手く伝えることができないからだと思います。「おはよう」や「バイバイ」なども直接会って話しているときにしかあまりつかわない言葉だと思います。この言葉はコミュニケーションをとる上でとても大切なことだと思います。

僕はこの休み期間でたくさん言葉の大切さに気づくことができました。だからもっと素直に「ありがとう」の言葉なども言って、良い友達関係をつくっていききたいです。

当たり前じゃない存在

《高校生・一般の部 入選》

広島皆実高等学校三年 高久 礼愛李

コロナウイルスの流行による約三ヶ月の休校。一月、流行初期頃はこんな事になると思っていませんでした。

一人暮らしの私は、日々の出来事を家で親と話すという事が出来なくて、そんな私のたわいもない話、相談を聞いて一緒に笑ってくれるのは学校で会える友達でした。毎日学校で会える事、ふざけ合ったり、相談し合ったりする事、それは私にとって当たり前でした。

三月からの休校。家に一人の私は、友達の大きさ、毎日友達と過ごす時間の尊さをととも感じました。当たり前ではない事に気付きました。

私の友達は、休校期間中、頻繁に電話をかけてくれました。沢山溜まった話をひたすら聞いてくれました。変顔の写真を送り合って笑い合いました。会えない間も私の大きな支えでした。

今回、友達の存在が当たり前でない事に気付き、今まで以上に大切にしよう、一緒にいる時間を楽しもうと思う事が出来ました。いつもありがとう、を伝えていきたいです。

失ったからこそ

《高校生・一般の部 入選》

A I C J 高等学校一年 脇本 裕一

今年、新型コロナウイルスの影響で私たち学生は多くのものを失いました。授業や友達と過ごす時間、それに学校行事はどれもかけがえのないものです。

しかし、皮肉ながらこれらを失うばかりではありませんでした。失ってからその大切さに気付くなんて話はよく耳にするものです。

私たちの学校は元々、ネット設備が整ったのもあってか、オンラインでの授業が比較的早く始まりました。休校が始まってからオンライン授業までそれほど長くは経っていませんでしたが、友達と一緒に時間を過ごすことにどこか安心感があつた気がします。

現在コロナ休校期間が明け、普通に学校に行き、授業を受け、友達と笑い合えます。やっぱり実際に会うとそのありがたみを深く感じます。困った時に相談にのってくれたり、一緒にバカなことができたりするのは友達ならではの気がします。

最後に私は友達にこう伝えたいです。「これからも一緒に居たい」と。ずっと一緒に笑ったり泣いたりしながら思い出を作りたい。